

II 特別連載 II

科学技術 振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第311回

新型コロナウイルスの感染拡大の影響による海外からの渡航制限のため、さくらサイエンスプログラムでも招へいが実施できない状況が続いている。科学技術振興機構(JST)では、これまでの交流により醸成された海外の送出し機関と日本の受入れ機関の良好な関係を継続させるため、また新たな交流に向けた準備のために、各機関によるオンラインプログラムへの支援を続けている。今回は桜美林大学が実施したプログラムを紹介する。

桜美林大学の活動報告



尾川 佳子 (桜美林大学 ビジネス マネジメント学群 准教授)

和食と「おもてなし」から学ぶ

新しいエンタメのカタチの創造

2022年2月4日(18日)、義守大学(台湾)の学生19名、教員1名、サンウェイイ大学(マレーシア)の学生18名、教員1名と、オンラインによる交流プログラムを実施した。

本プログラムは、東京オリンピック・パラリンピック競技大会誘致のきっかけにもなった、日本独自の「おもてなし」の精神や、その理念から派生する文化を、ユネスコ無形文化遺産にも登録された日本食や、日本企業が提唱する新たなレジャーの形でもあるマイクロツーリズムを通じて、レジャー産業やホスピタリティ産業(総称してエンターテインメント産業と定義)に関する学修をしている学生に、新たな知識を提供することを目的として計画した。そして、COVID-19の拡大によって、国内外の人の流れが停滞し、世界的に大打撃を受けたエンターテインメント産業を、withコロナ、afterコロナ時代に日本の強みをどのように活かし、V字回復させていくかを、講義や実習を通して学べるようなプログラムとして構成した。

【プログラム運営にあたっての懸念点とその対処方法】
本プログラムは当初対面型で実施予定であ

プログラムスケジュール	2月14日	・アイスブレイキング ・事前課題の発表 ・ユネスコ無形文化遺産「和食」を通して学ぶ日本のおもてなしの講義 ・日本の出汁の取り方のオンライン実習による出汁文化の異文化間比較
	2月15日	・八王子のマイクロツーリズムによる日本のおもてなし事例の紹介 - 日本食での大豆の活用方法と日本食店でのおもてなしの作法の動画紹介(とうふ屋うかい) - サステイナブルな酪農・農法による食材の提供に関する講義、動画紹介によるオンラインフィールドトリップ体験(磯沼ミルクファーム、オギプロファーム)
	2月16日	・八王子のマイクロツーリズムによる日本のおもてなし事例の紹介 - おもてなし空間の提供の一例紹介及びオンライン体験と動画紹介によるオンラインフィールドトリップ(八王子花柳界ゆき乃恵) - オンライン高尾山ガイド(TENGU Takao-san English Guide Club)
	2月17日	・最終プレゼンテーションの準備(自己学習)
	2月18日	・最終プレゼンテーションとディスカッション - 自国でのマイクロツーリズム展開とおもてなし例の考案

ったが、COVID-19の影響により参加者を日本に誘致することができなくなってしまうため、4日間のオンラインプログラムに変更して運営をした。オンラインで、どこまで日本のおもてなしやマイクロツーリズムについて参加者に体感してもらいながら理解してもらえらるか不安もあり、参加者たちが得られるであろう成果も未知数であった。

そういった懸念を打開するため、参加者がオンライン研修から、体験型の学びが得られるよう、あらかじめ各派遣元大学に日本食を調理するための食材や、和食器を発送してオンライン調理実習を実施したほか、オンライン高尾山ツアーなどを行った。さらに、フィールドワークで訪問予定であった場所に予めプログラムコーディネーターが訪問し、紹介動画を作成することによって、ゲストスピーカーからの講演内容の情景を分かりやすく伝えられるように工夫してプログラムを運営した。

【プログラムの運営成果】
そうした研修を運営した結果、各々の生活拠点を中心に据えたマイクロツーリズムをテーマとした最終プレゼンテーションの内容も、



オンライン和食レクチャー&実習



作成した動画のーコマ

共有することが真の異文化交流とサステイナビリティに繋がるのではないだろうか。このプロジェクトが、それが実現できる一つのきっかけとなれば幸いであり、今後はオンラインだけでなく実地開催できるように申請を継続し、相互の大学・学生間の交流を促進していく。

【今後の展望】
今回プログラムに参加した双方の大学は、
本学のビジネスマネジメント学群との学びの
親和性が非常に高く、今後もエンターテイメ

ント、レジャー、ホスピタリティなどをキ
に学生間交流を中心とした取り組みを進めて
いきたいと考えている。実際に、参加大学の
一つのSunway University (マレーシア)と
は、現在大学間協定がないが、先方の教員か
らはこのプログラムを機に将来的な提携を希
望する声もあった。
文明や科学が発展進化を遂げる現代には、
文化や感性の重要性がさらに問われていくと
考えている。その意味でもサイエンスとホス
ピタリティは切り離して考えるのではなく、
未来を担う若者には異文化交流の中で目に見
えるもの(文明・科学)だけでなく目に見え
ないもの(文化・ホスピタリティ)の大切さ
をお互いに理解し

とても充実しており、コロナ禍でも自国の産
業を盛り上げ、回復させられるような、地域
に根差した独自の提案がされていた。
参加者のメジャーや学びの嗜好が本プログ
ラムと合致していたこともあり、プログラム
中はオンライン上でも積極的に質問が寄せら
れ、相互にコミュニケーションをとることが
でき、新たな知識と経験を提供できたと思
えている。
プログラム後に実施したエバリュエーショ
ンでも、プログラム全般、担当教員、コーデ
イネーターの評価のほぼすべてで平均4点以
上を獲得することができた(5点満点、回答
者20名)。一点のみ、研修のプログラムの運
営環境の項目で、4点をわずかに下回ってし
まったため、次回以降同様のプログラムをオ
ンラインで運営する際は、プログラムの内容
だけでなく配信環境にもより配慮し、参加し
やすい環境を整えたい。
参加者からは本プログラムを終え、日本の
文化やホスピタリティ精神、地域に特化した
産業などに対してより一層興味関心が湧き、
実際に日本に来日して本学で学びたいとい
った声もあった。今回プログラムに参加した両
大学は、本学と同様に都市部にある大学であ
り、新型コロナウイルスによって受けた影響
も近いものがあった。そのような同じ環境
下に置かれた者同士が、同じ課題を開発する
ために、共に学び考え、新たなアイデアを
創出できたことは、本プログラムを運営して
得られたとても大きな成果であったと考
えている。



オンライン研修(マイクロツーリズムの概要紹介)